

マタイの福音書 第7章 4節

「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。」

悲しみと幸い同居することがあるだろうか。悲しみはなにかを失った者の嘆きである。悲しみはどうすることも出来ない無力さに途方にくれる者の感情である。悲しみは涙の向こうに何も見えない者が立ちすくむ姿である。ところが、ここでは悲しむ者は幸いです、と断言する。日常目にすることが無い、耳にする言葉ではない、いや、あり得ない断言である。

断言の直後というより、悲しみの直中で慰められる、と言明する。それだから、悲しむ者は幸いとなる。このみことばを聞いている者たちは悲しんでいた。悲しむところを持っていた。自分が抱える悲しみ、家族が抱く悲しみ、友が悲しむこと、街が抱える悲しみ、国民が抱えている悲しみがある。この悲しみを痛み、嘆くところを持つ者は幸いである。

その者は慰めの主からの慰めにあずかる。その者は悲しみのどん底でお会いする慰め主がいる。そして、その主に出会った者は、悲しみを共に悲しみ、その悲しみの世界を全くの慰めの世界へと変えられる体験者となる。だから悲しむところを与えられた者は幸いである。慰められ、慰めの主にお会いし、悲しみの直中において幸いな者とされるからである。

2022年9月15日